

機関番号：14401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520016

研究課題名 (和文) 哲学と家族

研究課題名 (英文) Philosophy and Family

研究代表者

須藤 訓任 (SUTO NORIHIDE)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：50171278

研究成果の概要 (和文)：

アルトゥール・ショーペンハウアーとその母 (ヨハナ) および妹 (アデーレ) の思想的関係について、比較研究を行い、母との関係としては、「旅行」および「諦念」を主たるトピックとして、両者の対照的であるがゆえの「家族的類似性」を明らかにし、妹に関しては、ドイツ本国でも正式な出版のなされていない小説に即して、兄とコントラストをなすその独自の歴史観の抽出を試みた。

研究成果の概要 (英文)：

I have attempted the comparative studies about philosophical relations between Arthur Schopenhauer and his mother (Johanna) and sister (Adele). With his mother his philosophy shows complementary “family resemblances” about topics “travel” and “resignation”. The sister explicates her own interesting outlook of history in her unpublished novel, which contrasts with that of her brother.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：哲学、家族、旅行、対話、諦念、歴史、ショーペンハウアー

1. 研究開始当初の背景

「哲学と家族」というテーマはそれまで設定されたことはほとんどなかったように思われる。いかなる哲学思想も、必然的になんらかの歴史的・社会的文脈のうちに位置する。

「家族」もそうした文脈の一つと見なされてよいが、なぜか伝統的に哲学は「家族」というトピックに対して強い関心をあまり示してこなかった。そのことは「家族哲学」という語が存在しないことに端的に表れている。

せいぜい、哲学者の生涯との関連で、その思想形成の重要な契機となった背景や出来事として、家族関係が伝記的情報の一環に繰り込まれるのが常態であったように思われる。本研究は「家族哲学」の構想そのものにズバリ切り込むというよりは、あくまで思想問題としての「家族」という観点から、哲学者のみならず、その家族もまた文化史的に重要な位置づけをされる事例としてアルトゥール・ショーペンハウアー一家を取り上げる。母親のヨハナは小説家・旅行作家として著名な女性作家であったし、妹のアデーレも作品は多くないものの、メルヒェンや小説などの領域に足跡を残している（父は早くに死亡している）。こうした「家族」という文脈に位置づけ直すことによって、アルトゥールの思想にも新たな光が当てられるのではないかというのが、本研究の目論みであり、その意味で、従来未開拓の思想研究の新たな視座ないし文脈の開拓の試みである。

2. 研究の目的

本研究は、哲学を家族関係という観点から再考察する試みである。取り上げるのは、アルトゥール・ショーペンハウアーの思想であるが、その母・妹との関係を、時代の推移によって規定されてくる「問題化」の状況に位置づけながら、思想の家族間「対話」として捉え返し、そのことによって、思想形成に果たす家族の役割を明らかにするとともに、哲学者の思想が具体的な家族関係にどのように波及するかを論及し、従来伝記的事実としてしか問題にされてこなかった領域を、哲学研究の新たな課題として発掘し深化させてゆくことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究はあくまで、文献の厳密な読解を基礎として遂行されるが、その際とくに二つの観点にそってその読解は行われる。その二つの観点とは

(1) ミハイル・バフチンの言う「対話」という観点。従来の哲学の書物の大半はモノログ形式で書かれているか、たとえ対話体であっても、実質的には独白と大差なかった。しかし、思想の生成とはすべからず「対話」として理解されるべきである。たとえ具体的な対話相手が不在であったとしても、つまり、一見モノログとしか考えられない思想展開であっても、あえて「対話」として読み取られなければならない。この「対話」の一つの重要な形態として家族間「対話」があり、その家族間「対話」としてショーペンハウアー哲学を解説するというのが本研究の一方

の視座である。

(2) 最晩年のミシェル・フーコーの言う「問題化」の概念。それまでは自明視されていた事柄が、時代の変動と共に、なんらかの個人によって問題視されるようになることを意味し、そのかぎり、「問題化」とはそれ自身時代の動向に対する個人の「回答」である。この「問題化」と上述の「対話」としての思想という、二つの概念を鍵概念に据えることによって、アルトゥール（とその家族）の思想理解に新たな展望を切り開くというのが、本研究の狙いである。哲学的言説も、そのままいずれかの相手との「対話」として理解され、「問題化」という形による時代の欲求への対応としてその意義が別扱されることによって、哲学は具体的な「外」の場合と、社会的に開かれてゆくことが可能となるはずである。本研究においては、その「外」への「開放」が「家族」を土俵とした、ショーペンハウアー思想の意義の新たな解釈として試みられる。

4. 研究成果

本研究においては、一方でアルトゥール・ショーペンハウアー哲学において注目されることが比較的少ないが、その思想的中核として重要視されるべきテーマとして、「退屈」論について、ハイデガーとの関連を探りながら考察し（下記「学会発表」④）、また「運命」論について、自由意志を巡る問題とリンクさせながら、スピノザとニーチェの同じテーマに関する思想と比較対照を行った（下記「学会発表」③）。他方でフリードリヒ・ニーチェの思想の内在的解釈として、「正義」（下記「雑誌論文」⑥）、「思惟経済」（下記「雑誌論文」④）や「憑依」（下記「雑誌論文」⑤）、また「身体」（下記「学会発表」①）といったテーマに関して、従来からの研究代表者の専門研究の延長上で、考察が遂行された。また、ミシェル・フーコーに関しても、その思想的特徴が文体の変遷との連関を追跡しつつ大づかみに描出され（下記「図書」②）、それとも関連する形で、より哲学一般の問題として「真理への欲望」について論究が試みられた（下記「図書」①）。これは「真理」という概念の確立と、それに半ば必然的にもなう心理的リスクについて、事実と規範の峻別と混同の問題と連動させながら論じたものである。（なお、翻訳として現在も刊行中の岩波書店版『フロイト全集』の第12巻が研究代表者の責任編集および共訳と

して、また第14巻が共訳として、それぞれ2009年、2010年に刊行された。）

「哲学と家族」という研究課題により即した形では、とくに四編の論文が発表された。ショーペンハウアー関係では母との関連で――

(1) 母と息子が19世紀初頭に一緒に行ったヨーロッパ周回の旅に対する、両者の対照的な反応の確認を通して、母が意図的に自己を「哲学」から距離をとることによって作家としての自覚を目覚めさせてゆくのに対し、十代半ばの息子が逆に旅行体験のうちから「永遠の哲学」への志向を地盤堅めしてゆく様子を描写し、母子の相互に逆方向のアイデンティティの確立をあぶり出した。（下記「雑誌論文」②）

(2) 母と息子二人の哲学的著（『意志と表象としての世界』正篇）と小説的主著（『ガブリエーレ』）を比較しながら、両者とも「諦念」を軸としながら、しかし正反対の方向性で、その世界観を構築しようとしていた様をあぶり出し、そのことを通してしかし、正反対の方向性でありながら、その思想的ないし物語的脈絡の展開及び転換の同軸性という形の、家族である二人の著作家の思想の、まさに家族としての「家族的類似性」の抽出を試みた。本論文は、哲学書と小説の「比較」の試論として、ある意味で冒険的な内容をもったものであるが、分量的にも、本研究における研究成果の白眉ともいえる論文となった。（下記「雑誌論文」①）

他方妹との関連では

(3) 妹アデーレの中編小説「アリッチャの麗人」を取り上げ、そこに盛られた歴史観を析出した。この小説はドイツ本国でも未だ正式な出版のなされていないものであるが、1849年にとある新聞に掲載された初出形態を底本にした。少なくとも本邦初の本格的紹介であり、考察の試みであると考えられる。近代初頭以降の世俗化の趨勢を不可逆的なものとして見定めるアデーレの歴史観は、兄アルトゥールのそれとは対照的なものであり、今後兄の思想との関連を探ってゆく上で、重要な論点となるはずである。（下記「雑誌論文」③）

さらに、

(4) 研究代表者の従来からの研究対象であるニーチェに関しても、五歳のときになくした父カール・ルードヴィヒが、とくにその思想の一つの軸ともいえるべき「病気」と「健康」というテーマに関して、「父」との同一化に相即しながら、どのような屈折した影を――とくに、ヴァーグナーとの蜜月時代とそこか

らの離反において――息子に対して落としているかを考究し、「哲学と家族」というテーマについて、ショーペンハウアーだけでなく、その考察範囲を拡大し、今後の研究の展開に向けて、一つの道筋をつけた。（下記「雑誌論文」⑦）

研究期間の最後には以上紹介した四論文をもとに、研究の目的や成果の概要も含めた「哲学と家族―ショーペンハウアーの場合」と題して研究成果報告書（総97頁、2011年3月）を作成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計7件）

①須藤訓任、「諦念という戦略―アルトゥールとヨハナ」、『大阪大学 大学院文学研究科紀要』第51巻、大阪大学大学院文学研究科編、pp. 1-48、2011年、査読無

②須藤訓任、「哲学者の揺籃―ショーペンハウアー母子の旅日記 1803-1804年―」、『哲学論叢』XXXVII、京都大学哲学論叢刊行会編、pp. 13-28、2010年、査読無

③須藤訓任、「苦悶の恍惚―アデーレ・ショーペンハウアー「アリッチャの麗人」をめぐる」、『ショーペンハウアー研究』第15号、日本ショーペンハウアー協会編、pp. 3-31、2010年、査読無

④須藤訓任、「憑依としての哲学―ニーチェの場合」、『KAWADE 道の手帖 ニーチェ入門』、河出書房新社、pp. 17-24、2010年、査読無

⑤ Norihide SUTO: Die Bedeutung der Denkökonomie beim späten Nietzsche, in: *Philosophia Osaka* Nr. 5, (Ed.) Philosophy and History of Philosophy/ Studies on Modern Thought and Culture Division on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 89-98, 2010、査読無

⑥須藤訓任、「ニーチェの「正義」論再考―

—「力への意志」の尺度をめぐって」、『理想』684 巻、理想社、pp. 2-15、2010 年、査読無

⑦須藤訓任、「ダイモニオンの警告——ニーチェとその父」、『待兼山論叢 哲学篇』43 号、大阪大学大学院文学研究科編、pp1-17、2009 年、査読無

〔学会発表〕（計 4 件）

①須藤訓任、「芸授と道徳としての身体」、西田哲学会第 8 回年次大会、明治大学（東京都）、2010 年 7 月 25 日

②須藤訓任、「苦悶の恍惚—アデーレ・ショーペンハウアー「アリッチャの麗人」をめぐって」、日本ショーペンハウアー協会、関西学院大学（大阪府）、2009 年 11 月 28 日

③須藤訓任、「必然性の憑依—スピノザ、ショーペンハウアー、ニーチェ」、スピノザ協会第 50 回例会および大阪大学文学研究科共同研究「ドイツ思想史における虚軸としてのスピノザ」共催における講演、大阪大学文学研究科、2009 年 1 月 24 日

④須藤訓任「哲学の「気分」としてのメランコリー」、ワークショップ「メランコリーの地平」における堤題、日本フランス語フランス文学学会 2008 年度春季大会、青山学院大学（東京都）、2008 年 5 月 24 日

〔図書〕（計 2 件）

①伊藤邦武他著：岩波講座『哲学 9 科学／技術の哲学』（執筆分担：須藤訓任「真理への欲望—真理は規範たりうるか」pp107-131）、岩波書店、2008 年

②篠原資明他著：『哲学の歴史 12 実存・構造・他者』（執筆分担：須藤訓任「フーコー」pp 581-612）、中央公論新社、2008 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

須藤 訓任 (SUTO NORIHIDE)

大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：50171278

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし